



本日の自由参観には、多数の保護者の方においでいただきました。感謝申し上げます。いかがだったでしょう。

## 見方こそ世界を変える

先日、4年生の総合的な学習の時間にお呼ばれました。その学習内容は、学校には、いろんな意味で危険な部分がある、という子どもたちの研究結果の報告会でした。この報告会を受けて、学校には結構な危険があり、その中でも大小の段差がたくさんあることに私は気づかされました。特に、渡り廊下の最初と最後には、微小な段差があり、結構つかかるとのこと。毎日歩いているにもかかわらず、私は気づいていませんでした。



そんな報告会の数日後、教育センター（熊本市教職員の研修機関）から榆木小へ訪問の機会があり、全教室の授業を見ていただきました。私は、その先生方を各教室へ順に案内していたのですが、なんとそのおひとりが渡り廊下でちょっとつまずいてしまったのです！今回は大事には至らず良かったのですが、大変肝を冷やしました。実は、先日4年生の子どもたちからこの段差の危険性についての報告を私は受けたばかりだったと、恥ずかしながらその先生に話したところ、次のようにおっしゃいました。

「私はつま先が上がらないのです。だからこの小さな段差でもつまずいちゃうんだよ。この小さな段差に気づいた4年生をほめておいてくださいね」

本当にすごい子どもたちです。

何がすごいのか。本来、この小さな段差は子どもたちの見方には引っ掛かりにくいものです。だって、通常、子どもたちはこのくらいの段差を軽く超えていくのですから。この段差に気づくためには、「自分ではない他者の見方」をしなければならない。相手の身になって、「もし〇〇だったら」とか「例えば△△とするならば」と自分にはない考えを受け止め、展開し、試行（思考）実践する必要があるのです。これ、口で言うほど簡単ではありません。実際に体験したことがないことを想像し、理解し、実践することほど難しいことはない。

これを可能にする唯一の方法が、学ぶことだと思っています。

そう、4年生の子どもたちのすごさは、総合的な学習の時間での体験を学びに変えている、ということ。担任の先生に話を聞いてみると、車いす体験やアイマスクを使った視覚障がいの方の体験などを、授業の中で行ってきたとのこと。その不自由さや大変さ、そして怖さまでもを体験した子どもたちは、自身の知識とつなげて、深く実感したのだと思います。体験を確かな経験へと培っていた。その確かな経験から、段差に気づくことができた。

さらに、気づきを「報告」という表現に変えられたことも、特筆すべきことです。経験（車いすの場面）を違う場面（榆木の状況）に生かした、という深い学びが起きていたのです。

経験と学びの違いは、他の場面に生かすことができたかどうか、にあります。

4年生の授業場面を超えた学びの瞬間に、私は出合いました。この学びの源泉は、やはり「他者の見方になる」こと。この子どもたちのように、自分にはない見方を縦横無尽に駆使することで、今の世界すら変えることができるのではないかと、夢が膨らむ出来事でした。